ジオ・ポンティの眼：軽やかに越境せよ。
Lo Sguardo di Gio Ponti: Attraversare i Confini con Leggerezza

イタリアのモダニズムを代表する建築家、ジオ・ポンティの視線で世界を視る

2025年3月19日（水）～31日（月）21_21 DESIGN SIGHTギャラリー3 にて開催

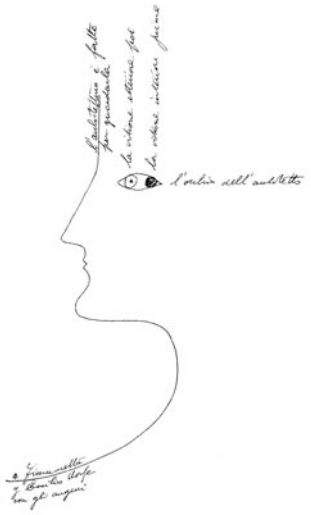
2025年3月19日（水）～31日（月）21_21 DESIGN SIGHTギャラリー3 にて、展覧会『ジオ・ポンティの眼：軽やかに越境せよ。』を開催します。

20世紀イタリアのモダニズムを代表する建築家、ジオ・ポンティ（1891-1979）は、スプーン1本から高層ビルまでデザインし、部分から全体を統合的に捉える「眼」を備えていました。

1960年竣工の＜ピレリ高層ビル＞、そして1957年の発表の超軽量の椅子＜スーパーレジェーラ＞は、薄さ、軽やかさを表現した名作です。さらに近年、知られざる名作家具やプロダクトの数々が復刻され、巨匠の多面的な魅力が浮き彫りになってきました。

本展では、ジオ・ポンティ・アーカイヴスの協力のもと、主にポンティがミラノ、デッツァ通りの自宅のためにデザインした家具から、モルテーニにより復刻されたアームチェア、コーヒーテーブル、ブックシェルフと、床に大胆に導入されていたセラミックタイルの再現を通して、ポンティ独自の空間世界をインスタレーションします。また、およそ60年にわたる巨匠の仕事を振り返る大パネルには、1920年代のリチャード・ジノリの磁器製品やオリジナルドローイングの展示のほか、フランチェスカ・モルテーニ監督によるドキュメンタリー映像『Amare Gio Ponti』を紹介し、ジオ・ポンティの視線の先にある私たちの未来を考えます。

ジオ・ポンティの眼



ジオ・ポンティの眼で世界を視ると、大量生産に対するアートと工芸、またミニマリズムに対する装飾、という世の中に横たわる二元論を軽やかに超えた、住まいの風景が未来に向けて開かれてきます。

ポンティは87年の生涯で２つの世界大戦を生き抜き、ウィーン分離派、イタリア合理主義、モダニズム、など時代のイズムに留まることなく、また建築、プロダクト、グラフィックなど分野の細分化にも与せず、統合的に自身の「眼」を追求しました。その軽やかに越境する表現、幸福感が、現代の私たちが必要とするものと共振しはじめます。約70年を経たデザインが現代に、ノスタルジーからではなく、新鮮な魅力を放つ理由は、そこにあるのではないでしょうか。

開催概要

タイトル：ジオ・ポンティの眼：軽やかに越境せよ。
Lo Sguardo di Gio Ponti: Attraversare i Confini con Leggerezza

会期：2025年3月19日（水）- 3月31日（月） 10:00 - 19:00 / 休館日 3月25日（火）

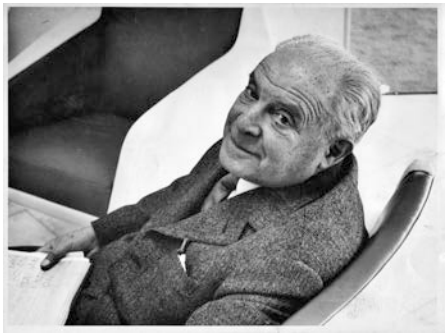
会場：21_21 DESIGN SIGHTギャラリー3（東京都港区赤坂9-7-6 東京ミッドタウン ミッドタウン・ガーデン）

入場料：無料

特設ウェブサイト：https://www.gioponti-exhibition-japan.com/
21_21 DESIGN SIGHT：https://www.2121designsight.jp/

ジオ・ポンティ Gio Ponti（1891~1979）
1891年 ミラノ生まれ。
1921年 ミラノ工科大学卒業後、建築設計事務所を設立。
1923年 磁器メーカー＜リチャード・ジノリ＞（当時）の
アートディレクターに就任。
1928年 建築誌 <domus>を創刊。

以降、建築、デザイン、編集、舞台美術など、多岐にわたる分野で数多くの作品を手がける。
代表作に＜ピレリ高層ビル＞、＜スーパーレジェーラ＞など。
近年、再評価が進み複数のメーカーから家具、プロダクトの復刻が進められている。



©Gio Ponti Archives - Archivio Storico Eredi Gio Ponti

展覧会の見どころ

1. ジオ・ポンティが活躍した1920年代〜1970年代までのプロジェクトを時系列で紹介する大パネル

2. **ポンティが設計し家族と住んだ住まいを再解釈したインスタレーション**

近年復刻された家具・プロダクトの他、床に使用されていたストライプのタイルは本展のために再現しました。

3. 直筆のスケッチ、1920年代のリチャード・ジノリの磁器などの貴重な作品

4. ジオ・ポンティと日本のつながり

LIXILによるミラノのサン・フランチェスコ教会のファサードに使用されたタイルの復元や日本人の元弟子で建築家の友人に宛てた直筆の手紙など、ジオ・ポンティと日本のつながりをご覧いただけます。

5. ドキュメンタリー

フランチェスカ・モルテーニ監督によるジオ・ポンティのドキュメンタリー映画「アマーレ・ジオ・ポンティ」を紹介します。

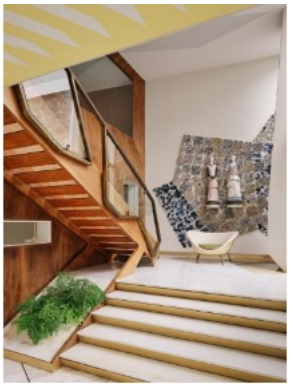
1960年にミラノに竣工した
「ピレリ高層ビル」
©Gio Ponti Archives - Archivio Storico Eredi Gio Ponti

1927年にリチャード・ジノリで制作された
磁器作品＜天使像＞
愛知県陶磁美術館蔵

ミラノのサン・フランチェスコ教会
Photo : Toshihide Kajihara 梶原敏英

モルテーニ ジオ・ポンティ コレクション

モルテーニがジオ・ポンティに捧げる本コレクションは、2012年にジオ・ポンティ・アーカイヴスとポンティの相続人との協力のもと、スタジオ・チェッリ＆アソシアーティのアートディレクションによって誕生しました。これは、20世紀を代表する建築家への賛辞であり、歴史と向き合いながら、イタリアおよび国際的な建築界の重要な人物たちへの再評価を促すきっかけとなっています。
ジオ・ポンティ・アーカイヴスと共に行った長い調査と研究を経て、ポンティが個人住宅や特別なプロジェクト、小規模なシリーズのためにデザインした歴史的な家具を復刻。オリジナルを尊重しつつ、これらの新しいアイテムは、最新技術を駆使して製造され、モルテーニのトータル・リビング・コンセプトと現代的なライフスタイルにふさわしい形で現代に蘇っています。



アームチェア「D.154.2」
(1953-57 Molteni&C Heritage Collection)
Photo by Frederik Vercruysse

アームチェア「D.153.1」
（1953 / 2012, Molteni&C Heritage Collection）

コーヒーテーブル「D.555.1」
（1954–55/2012, Molteni &C Heritage Collection）

Lama ドアハンドル／Olivari

Olivariとの長い協働関係の中で、ジオ・ポンティはハンドルデザインにおいて二種類のアプローチに焦点を当てていました。ひとつは「有機的で、より機能的」つまり、婉曲したデザインで形作られたハンドルレバーが、手の握りにフィットするという考え方。もうひとつは「幾何学的」つまり、形状に「自然に」適応するのは人の手の方だという考え方です。前者は、より表現力豊かで人間工学的なニーズを取り込んだ「独立した形」のデザインに繋がりました。一方で後者は、彼を「直線的で調整された形」の方向へと導き、結果として得られたモデル Lama は、「古典的象徴主義」が「機能的」アプローチに勝る、彼のビジョンを凝縮しています。Lama(イタリア語で刃の意味)のように薄い、ハンドル形状の幾何学的な純度に対し、研究し尽くされた光の当たり方が、薄く縁取られたそのシャープな輪郭を和らげています。彼はこのアプローチを、ミラノのピレリ高層ビルのハンドルをデザインする際にも採用し、誕生したモデルがLamaです。無駄な部分がひとつもなく、今でも傑作と言われているLamaは、究極なまでに洗練されたドアハンドルです。

Lama ドアハンドル／Olivari
画像提供 : 秀光

関連イベント

2025年3月19日(水)〜6月30日(月)

国立新美術館で開催される企画展「リビング・モダニティ　住まいの実験 1920s - 1970s」の期間中、関連展示企画「リビング・モダニティ today」にてモルテーニのジオ・ポンティコレクションを出展します。

本展の会場から徒歩約5分の会場です。ぜひお立ち寄りください。

会場：国立新美術館 2階企画展示室2E
入場料 無料
※「リビング・モダニティ」展の1階会場への入場には入場料が必要です。
詳細は展覧会ページをご確認ください。https://living-modernity.jp/

2025年3月19日(水) 15:00〜16:30

映画「アマーレ・ジオ・ポンティ」上映会＆スペシャルトークイベント

登壇者：サルヴァトーレ・リチトラ / ジオ・ポンティ・アーカイヴス、フランチェスカ・モルテーニ監督
会場：国立新美術館 2E展示室 特設会場　入場料：無料　予約不要

Amare Gio Ponti ジオ・ポンティを愛して
（フランチェスカ・モルテーニ監督、2015、34分）

建築家であり、イタリアンデザインを牽引してきた先駆者ジオ・ポンティ。50年以上にわたり、不屈の精神ですべてのことを試みた。小さな物から大きな物まで、例えば、ドアハンドルのデザインから都市計画の構想まで。「建築とは人生の解釈だ」と彼は書いている。無関心と忘却の彼方へ追いやられようとしていた近代の伝播者である。

トークイベント登壇者紹介

サルヴァトーレ・リチトラ / ジオ・ポンティ・アーカイヴス　Salvatore Licitra / Gio Ponti Archives
1953年ミラノ出身の現代美術の写真家。1973年からDomus誌やパラディーノ、バスキアなどのアーティストとコラボレーションを行う。1990年には初の個展を開催し、Bombeという作品集を出版。1998年には、ボブ・ウィルソン監督のSeventy Angels on the Facadeでジオ・ポンティを演じ、2011年の第54回ヴェネツィア・ビエンナーレにも参加。1996年にはサルヴァトーレの祖父であるポンティの元スタジオをベースにジオ・ポンティ・アーカイヴスを設立。このアーカイヴは、数千点に及ぶ写真を基に、ポンティ作品の研究、出版、展覧会の重要な資料として広く認知されている。Gio Ponti Archi-designer（2018年）、Gio Ponti: Amare l'architettura（2019年）など、数々の重要な展覧会や書籍のキュレーションを手掛けている。
WEB : https://www.giopontiarchives.com
Instagram : https://www.instagram.com/giopontiofficial

フランチェスカ・モルテーニ　Francesca Molteni / Muse Factory of Projects
作家、監督、MUSE Factory of Projects創設者
ミラノ大学で哲学を学び、ニューヨーク大学で映画制作を学ぶ。2002年からドキュメンタリー、TVフォーマット、ビデオ、展覧会の制作・監督を行う。2009年に現代のデザインと建築を中心にした制作会社MUSE Factory of Projectsを設立。2012年イタリア大統領からイノベーション賞を受賞の他、コンパッソ・ドーロ honorable mention 、キャセイパシフィック女性起業家賞など受賞多数。La Repubblica、Domus、Elle Decorに寄稿するほか、Icone d'impresaの著者でもある。近年では、モルテーニ・グループ、モルテーニ社の映画やビデオインスタレーションの制作を手掛ける他、同社のジオ・ポンティコレクションをキュレーションする。（ジオ・ポンティアーカイブスとの共同）その他、著名なデザイン展のキュレーションなどを手掛け幅広い分野で活躍する。WEB :
https://museweb.it/　Instagram : https://www.instagram.com/musefactoryofprojects

関係者クレジット

主催：Molteni&C、株式会社アルフレックスジャパン
監修：サルヴァトーレ・リチトラ /ジオ・ポンティ・アーカイヴス
　　フランチェスカ・モルテーニ /ミューズ・ファクトリー・オブ・プロジェクツ
キュレーター：田代かおる
会場構成：トラフ建築設計事務所
グラフィックデザイン：田部井美奈
スタイリング：川合将人
施工：HIGURE 17-15 cas
編集協力：雑誌CONFORT（建築資料研究社）
プレス：株式会社ハウ
特別協力：愛知県陶磁美術館
協賛：株式会社 秀光
協力：CERAMICA FRANCESCO DE MAIO、GINORI 1735、Olivari、Rezina、
　　上村正直 建築設計事務所（遺族）、株式会社カッシーナ・イクスシー、株式会社サンズ、
　　株式会社メトロポリタンギャラリー、株式会社ロイヤルファニチャーコレクション、株式会社LIXIL

プレスお問合せ先（日本）
株式会社ハウ
Mail. pressrelease@how-pr.co.jp　Tel. 03-5414-6405

Press Inquiry：Molteni&C Press Office
Raffaella Casati
Mail. raffaella.casati@moltenigroup.com
Tel. +39 0362 359 267

お客様お問合せ先
MOLTENI&C TOKYO
Tel. 03-3400-3322
Website. https://www.gioponti-exhibition-japan.com/